

# 円福寺の宝篋印塔

えんぷくじのほうきょういんとう



文化財愛護シンボルマーク

名称	円福寺の宝篋印塔	時代	南北朝時代、康暦元年(1379)
別称	円福寺の康暦元年宝篋印塔、円福寺石造宝篋印塔、石造宝篋印塔	所在地	加古川市志方町高畑544
数量	1基	所有者	円福寺
法量	塔高122cm(基礎から笠まで) 総高230cm(基壇から後補相輪まで)	指定	兵庫県指定文化財
材質	石造、花崗岩製	指定分類	建造物
		指定名称	石造宝篋印塔
		指定年月日	昭和47年(1972)3月24日



円福寺の宝篋印塔

円福寺は、高砂市から加西市北条へ続く街道沿い、加古川市志方町高畑に建つ寺院で、嘉吉の乱で將軍足利義教を暗殺したことで知られる赤松満祐が応永4年(1397)に念仏道場として堂宇を寄進したことに始まると伝えられています。江戸時代後期の『播州名所巡覧図絵』には、「寺中満祐の墓あり、法名圓福寺殿満祐性具大居士と宝篋印塔に刻せり」と記されています。ここに記されたものが、現存の宝篋印塔を指しているかはわかりません。ただし、満祐は嘉吉元年(1441)に自刃しているため、康暦元年(1379)の銘文がある。この塔が満祐の供養塔として造立されたものでないことがわかります。

宝篋印塔とは、基礎、塔身、笠、相輪からなる塔の一種で、笠を段形につくり、軒の四隅の隅飾を立てた形をしています。宝篋印塔という塔の名は、宝篋印陀羅尼の経文を納めたことから名付けられているといわれますが、主に供養塔や墓碑として造立されています。

この宝篋印塔は、花崗岩製で、高さ七尺の大塔です。また、現在の墓地など、今までに何度も位置を変えており、はじめの建立場所は不明です。

反花式基壇の上に建ち、基礎は、四面が輪郭付格座間入りで、それぞれ内部に開蓮華を刻出し、正面の左右の輪郭上に「一結衆等」「康暦元年己未十月十日」の銘文が刻まれ、南北朝時代の康暦元年(1379)に造立されたことがわかります。塔身は、各面の月輪中に金剛界四仏種子(ウーン/阿闍如来)、𑖀(タラーク/宝生如来)、𑖀(キリーク/阿弥陀如来)、𑖀(アク/不空成就如来)を配しています。笠は、下二段上六段の定型式で、隅飾はやや外方へ開き二弧輪郭付で、各面内部に月輪を刻み、それぞれ異なった梵字、すなわち八方天の種子を配置しています。

現在、上に立てられている相輪は凝灰岩製の後補のものですが、昭和50年代後半に、本堂の西側の墓地で、花崗岩製のものとの相輪の部分が見つかり、この塔の右に立てています。この相輪は、伏鉢を欠失しています。

この宝篋印塔は、全体によく整っており、造立年代



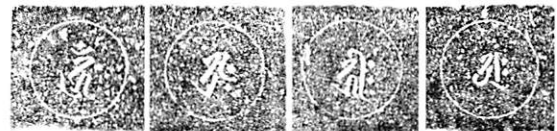
円福寺本堂(左が石棺、右が宝篋印塔)

〔基礎銘文〕

康暦元年  
己未十月十日  
一結衆等



基礎正面拓本



塔身拓本(左から、𑖀(ウーン)、𑖀(タラーク)、𑖀(キリーク)、𑖀(アク))

の明らかな南北朝時代の塔として貴重なものです。

また、高砂市阿弥陀町の時光寺に、この塔と類似した康暦2年(1380)の石造宝篋印塔があり、同じ石工によって作られた作品であると考えられています。

円福寺本堂の前には、この宝篋印塔のほか、古墳時代の家形石棺が保存されています。

(拓本/『加古川市史 第7巻』から転載、文・写真/宮本)

〔各部法量〕

- 相輪…現高58cm (後補相輪 高81cm)
- 笠…高44cm・幅57cm 塔身…高30cm・幅31cm
- 基礎…高48cm・幅59cm 基壇…高27cm・幅62cm

●参考文献

- 『印南郡誌』加古川市(1986年)
- 『加古川市史 第7巻』加古川市(1986年)

●キーワード

- 建造物、宝篋印塔、円福寺、金剛界四仏、種子、康暦元年

●所在地/加古川市志方町高畑544 円福寺境内

●交通/JR宝殿駅「北条」行神姫バス「高畑」バス停から東へ徒歩2分  
車は山陽自動車道「加古川北インター」から南へ2.5km

